スクール・トラウマに関する臨床心理学的研究
－A中学校における臨床心理士の支援事例を通じて－

久木崎 由 衣

【問題】
現在、私たちに様々な災害が降りかかってきている。2011年3月に発生した東日本大震災の影響は今も続いている。この震災直後から声高に叫ばれていたのが「心のケア」である。「心のケア」の一としてPTSD（Posttraumatic Stress Disorder）やトラウマなどへの支援が挙げられる。
その中でも特に学校では日常、事件、事故、自然災害が多発している。そのような状況下で生じたトラウマを、スクール・トラウマ（久留，2001）という。

スクール・トラウマの状況において、児童生徒たちに起こる様々な変化を察知し対応するため保護者はもちろんのこと、教師や専門家（臨床心理士、以下CCP）等である。しかし、児童生徒のトラウマを少しでも和らげる手助けを目的として介入しても、教師や専門家にPTSDやトラウマに対する支援方針が一致していなければ、児童生徒にとって、支援者が「セッドシティピスト（二次加害者）」となる可能性がある。場合によっては被害者が支援者に対して「敵か味方か」というような思いを抱くこともある。

久留（1990）は、PTSDへの支援方針として3つのポイントを挙げており、それを踏まえて関わることでその人の生きがいが確立されていくという。また、村瀬（2011b）もトラウマへの支援活動の特質として7点を挙げており、被害者のニーズに合わせた支援方針を考えていくことが、被害者にとってよりよい支援に繋がっていくと思われる。特に、事態に対する的確なアセスメントを持つことが、つまり、被害者の心の微妙な変化を的確に捉えることが重要である（村瀬2011b）。本論文では、「事態についての的確なアセスメント」をスクール・トラウマへの支援における「視点」とし、論を進めることにした。

我が国にトラウマ、PTSDが初めて紹介されてから約20数年が経ち、PTSDに対する支援が多様に紹介されてきたが、適切な協働の姿勢、チームワークが必須である（村瀬，2011a）。つまり、支援チームとして介入した場合、支援方針や視点が統一していなければ、支援を受ける側は被災のショックに加え、さらに混乱し、誰を信じればいいのか分からない状態になってしまうのではないか。

以上のことを考え、CCPがスクール・トラウマへの支援における必要な支援方針や視点などについて検討することが重要になると考える。

【仮説】
スクール・トラウマへの支援においては、CCPの支援方針や視点が重要であり、支援チーム内で統一されていることで、同じ目標を共有することができ、被害者が混乱することなくトラウマ体験から回復への進むのが難しいのではないか。本論文では、村瀬（2011b）の被害者支援の特性の7点を「支援方針」とし、「視点」を「事態についての的確なアセスメント」とする。また、「回復」については、ハーマン（1999）の回復の段階をトラウマ体験からの回復とする。

【目的】
CCPがどのような支援方針や視点で支援をしてきたのか、回復への支援がきっかけは何なのかを明らかにする。その上で、残された課題は何なのかを考察し、スクール・トラウマの支援に必要不可欠な要因を見出していくことを目的とする。

【方法】
研究協力者スークール・トラウマへの支援を行ったCCP3名（A・B・C）の臨床経験は、平均12.8年）に対してインタビュー調査を実施した。

調査期間：2011年4月上旬～4月下旬
場所：インタビューの場所は、研究協力者の都合に合わせ、秘密の保持できる公共施設の個室や、筆者が所属している心理臨床相談センター内の相談室を使用した。

手続き：研究協力者に研究の目的や倫理的配慮を説明し、研究倫理規則に関する誓約書により了解を得た。

インタビューを行うにあたり、先行研究を参考にし、大学院教員や大学院生との合議により作成
した質問項目(14項目)を用いた。インタビューの時間は、約1時間半程度であった。
分析は、半構造化面接の逐語記録を作成し、データを繰り返し読み込み、意味のまとまりごとに細分化カテゴリー化した。その際に大学院教員や大学院生との合討を行った。研究協力者の支援方針や視点、実際に行った支援の内容や課題などについて分析した。

【結果】
1. 質問項目結果
支援方針　CCP 3名に共通していた支援方針は、人としての尊厳性を重視した支援であり、被害者との面接で感じたことを言葉にして伝えていた。また、PTSDが「異常な状態における正常な反応」であることを理解し、出来事に触れることなく被害者の表現を持つことであった。フラッシュバックは残る可能性はあるが、被害者が話したいときには静かに聴き、希望の光が見えてくるように相手に寄り添っていた。キープーソンへの心理教育も実施し、相手が求めていることに応じて連携を進めていた。
視点　CCP 3名に共通していたことは、生徒の回避症状が何かが、ここを掘り下げのようなこととせず、あえて心の傷には触れないとということを心がけていた。周囲への配慮として、亡くなった生徒の親友には特に配慮して関わっていた。
さらに、安定した視点を持つためにもCCPとして自分自身が安定していることが大切であり、CCPとしても自分らしく支援する心がけていた。
きっかけ　回復に向かったきっかけとしては、CCP 3名ともに大きなきっかけは感じていないかったが、生徒や教師が徐々に快方に向かっていることは実感していた。

2. カテゴリー化した結果(仮説の検証)
合計で支援の流れに沿って分類した結果、「CCPが支援してきたこと」、「回復のきっかけ」、「(支援の結果)」、「(支援の)課題」というカテゴリーが見出された。
「CCPが支援してきたこと」では、専門家として求められていることには答えていたが、押し付けがましくならないように黒子の存在であること、しかし、求められた時にはしっかりと答えられるようにし、自然体のCCPで支援するということが共通していた。また、教師に対しては教師の持っているプライドを大切にしつつ、それぞれの教師に合わせた関わりが進められていた。

「回復のきっかけ」では、徐々に快方に向かっていることは実感していたものの、大きなきっかけはなかった。CCPに対して気持ちがよくなってくると本音が言えるようになってきており、きっかけは些細なことから自然に生じていることがわかった。
「(支援の)結果」は、生徒たちの表情が生き生きと変わってきた、学校内に明るい声が響くようになったことがあり、時間の経過によりしだいに変化がみられるようになっていった。
「(支援の)課題」は多岐にわたっていた。1つの例として、支援チーム内でのスーパービジョンなどを望む声があった。
以上の結果から、仮説を検証した結果、村瀬(2011 b)の支援方針や視点と大部分が重なっていた。生徒たちの回復については詳しく語られるこことはなかったものの快方に実感は得られ、ハーマン(1999)の述べている「再統合」の時期に入っていっていると思われる。生徒たちが事故のことを受け入れ自分たちに未来へ前進しようとする姿を感じたという。

【考察】
インタビューの内容を分析した結果、3名のCCPの支援方針が共通していることによって、支援内容にもずす一貫性がみられていた。被害者の心理を深く理解しつつ被害者の気持ちに立ち、積極的に支援を行うこともあれば一歩引いて支えるということもあり、支援方針が統一していることと、より良い支援を行うことができているようだった。特に被害者支援においては、村瀬(2011 b)の述べる支援方針や視点も重要であるということが見出された。
3名のインタビューから事故についての的確なアセスメント、つまり「視点」を持ちながら関わることによって、生徒、教師、保護者の些細な変化にも的確に認識していた。
今後の課題点としては支援の中の定期的なスーパービジョンの設定など、支援する側も自分らしくいることができ、安定できるような体制を考えていくことが望ましいのでは、という点が挙げられていた。
スクール・トラウマへの支援に関しては、トラウマ、PTSDに対する的確なアセスメントを持った上で統一した支援方針を確立し、その上で人としての心を忘れずに、相手の立場に立った支援を行っていくことが必要不可欠なことであると考えられた。